とうほうどうわどうわ

風未素

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とつほづとつわとつわ

【コード】

N8423W

【作者名】

風未素

【あらすじ】

童話を東方のキャラでやったらどうなるでしょう。

ごめんなさい。

とっほっほまたのっほ(前書き)

思いつきど書いてしまいました。

とうほうもまたのう

とうほうもまたのう

昔々ある所に、お婆さんとお婆さんがいました。

「お婆さんなんて……。紫の方が適役でしょ」

「まあまあそう固い事言うなって！ 私には霊夢しかいないんだぜ」

紅白で目出度いお婆さんと白黒で西洋かぶれのお婆さんは、とても仲が良かったのでした。

「ああもうこんな時間？ 洗濯しなきゃ」

「じゃあ私は芝刈りに行って来るな」

そうしてお婆さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に出かけました。

「……魔理沙の服って真っ黒よね。汚れなんて分からないし、洗わなくても良いんじゃないかしら？」

お婆さんが悪だくみをしていると、川の上流から大きな桃がどんぶらこ、とんぶらここと流れてやって来ました。

「しよ、食材……！」

お婆さんは脇目も振らずに川に飛び込み、その桃をかつぎ上げま

した。一歩間違えれば命が危ないのに、生きる力とは素晴らしいものですね。

「これで……一週間はもつかしら？ いや、魔理沙に内緒にしておけば二週間？」

お婆さんが更なる悪たくみをしていると、遠くの方で爆発が起きました。ちなみに、白黒のお婆さんの座右の銘は、「芝刈りはパウーだぜ」だそうです。

「うふふ」

紅白のお婆さんは上機嫌で家に帰りました。

「早くしないと魔理沙にばれちゃう」

お婆さんは桃を一人占めするために足を速めようとするのですが、桃が重過ぎるせいか中々速度が上がりません。

「お！ でっかい桃じゃないか！ 運ぶの手伝ってやるから一緒に食べようぜ」

「くっ……！ ここまでか……」

とうとう紅白のお婆さんは、白黒のお婆さんに見付かってしまったのです。

二人で運ぶことにより、すぐに家に着いたのですが、紅白のお婆さんはやり切れない気持ちでいっぱいです。さっきまでの上機嫌は、すでに失われてしまったのです。

「美味そうな桃だなあ！ よし私が切つてやる！」

そう言つと白黒のお婆さんは、包丁を持ってきて桃を真つ二つにしようと思えます。

「ちょっと待ちなさいよ！ これで三週間持たせるんだから！ こう、外側の部分からちまちまと……切りなさいよね！」

すかさず紅白のお婆さんが止めに入り、口論になりました。すると……

「うっさー！ 私が気持ち良く寝てる所を邪魔するなー！」

なんと、桃の中から二本の角が生えた赤ん坊が飛び出して来たのです。

「わ、私の桃の中から……」

「スイカが生まれた……」

それから、お婆さんとお婆さんはその子供に「もまたのう」と名付けて育てました。

みるみるうちに大きくなった（気がする）もまたのうは、ある日お婆さんとお婆さんに言いました。

「何で萃香じゃなくてもまたのうって名前を付けたのか分からないし大体もまたのうって何かが違うくない？ って気がするしもまたのうの役つて某天人の方が合ってると思つたんだけどそれは置いといて、近頃鬼が出没するそうなので退治して参ります」

「鬼はあんたでしょ」

「私には霊夢も鬼に見えるけどな」

「うっさいわね。もまたのう、鬼退治は良いけどちゃんと金品を奮い取って来るのよ」

お婆さんはもまたのうを激励しました。激励しただけでした。

「え、あれ？ きび団子頂戴よ」

「無いわよそんな物。あんたがお金を持ってくればいくらでも作ってあげるけどね」

「魔理沙婆ちゃん、私も霊夢婆ちゃんが鬼に見えてきた。特に腋の部分が」

「そうだろう。霊夢は立派な鬼だ。特に腋の部分が」

「……さつさと行きなさいよ。あんたが私を幸せにしてくれたら鬼じゃなくなるわよ」

そうしてもまたのうは、生まれた時から持っていた、酒が無限に湧いてくるといふ瓢箪だけを隠し持って旅立ちました。

「うっきー。きび団子をくれたらゲホッゲホッゲホッグヴァッ！！」

もまたのうは、家から少し歩いた所にある森で、何だか紫色のお猿さんに声を掛けられました。喘息持ちなのでしょうか、とても苦しそうです。

「大丈夫？ これ飲んで落ち着きな」

もまたのうは隠し持っていた瓢箪を取り出し、お酒を紫のお猿さんに飲ませてあげました。

「ちよつ、これお酒グパア！」

紫のお猿さんは、お酒をもらってとても喜びました。

「……」

「お猿さん、落ち着いた？」

「……少し待って、きもちわるいわ」

「お猿さん、落ち着いた？」

「……いや、だから」

「お猿さん、落ち着いた？」

「……病人にお酒飲ませるって」

「お猿さん、落ち着いた？」

「……はい。落ち着きました」

「それは良かった。じゃあ鬼ヶ島に行こう」

「……はい」

喜んだおパチユリーさんはお礼に旅に同行してくれると言つので、ももたのうは心良く受け入れました。

「わんわん！ きび団子くれたら仲間になつてあげますおー」

さらに奥に進むと、今度は真っ白な犬が現れました。

「この瓢箪の中にきび団子が入ってるから、飲みな」

「それさつき私に飲ませたお酒じゃない」

お猿さんが余計な事を言ったのですが、犬にはその言葉が理解出来る程の頭が無かったので、ももたのうから貰ったお酒を一气飲みしてしまいました。

「ありがとうこじゃいまふ。わたしもたびについて行きまふ」

ももたのうの施しに感激した椀犬は、鬼退治に着いて行く事になりました。

「ぎゃおーたーべちャーうぞー」

もっと奥に進むと、コウモリのような形をしたキジに襲われました。

「あ、レミィ」

「あ、パチエ。久しぶり」

こうしてキジも、鬼退治に同行することになりました。

「ついに鬼ヶ島に着いたぞ！ 皆、準備は良いか？」

「ちょっと待って、また喘息がゲホッゲホッゲホッ！」

「私か？ 私は酔ってなどいないぞ。さて、今日の獲物は ×

」

「夜になったな。夜は私のものオオオッ！ 誰も私を止められん！

WREYYYYY!!!」

皆準備は万端なようです。鬼ヶ島に乗り込む時がやってきました。

「突撃——!!!」

もまたのうが勢いよく扉を開けると、一匹の鬼が仁王立ちをしていました。

「あ、萃香じゃん。どうした？」

「おう勇儀。鬼退治に来た」

「鬼？ 鬼って、そこにいる吸血『鬼』かい？」

「WREYYYYY」

「うん。そうじゃない？ あと、お金貸して欲しいんだけど」

「それまた突然。何か困った事でも？」

「これとは別の鬼にたかられててね、大金が必要なんだ」

「たかられてるう！？ 一体誰だ、そんな奴は」

「……博麗霊夢」

「……あ、そうか。これ、通帳だから。二千万位入ってるから。頑張れ」

「ありがとう勇儀！ 心の友よ！」

「鬼退治もしなきゃアレだろう？ さっさと済ませよう」

「そうだね」

「WREYYYYYいたっ！！」

そうしてももたのうと突然出てきた助っ人は、キジに化けていた鬼を倒しました。

「お！ ももたのうが帰って来たようだぜ！」

「ちゃんとお金稼いだのかしら」

長い旅を終えたももたのうは、猿と犬と気を失った鬼を引き連れて帰って来ました。助っ人さんはいないようです。

「お婆ちゃん！ ただいま戻ったよ！」

「よし、良い子だな。流石私の子だ」

「猿と犬が増えてるじゃない。家でそんなの飼えないわよ」

「大丈夫！ はいこれ通帳！」

「な、に、二千万円！ ええと、一ヶ月の出費が平均5、620円でもしもたのうがペットを飼ったら出費は二倍の11、240円。二千万円を11、240で割ったら約1779でそれをまた12で割ったら約148……。148年分！？ 十分だわ！ 十分過ぎるわ！」

「一ヶ月五千円って、私達ってよっぽどせっぱ詰まってたんだな」

「動物飼って良いの！？ ありがとう霊夢婆ちゃん！」

「……私って、必要なかった気がするゲホッゲホッ！」

「……私か？ 酔ってないと言っているだろう。さて、今日の晩御飯は \$ ？」

「こうしてももたのうは、幸せに暮らしましたとさ。めでたしめでたし。」

とじほつもまたのつ(後書き)

気分転換です。

とじほんせんやうにゃん（前書き）

さんどりにゃんとは、サンドリヨンのことです。
サンドリヨンとは、シンデレラのことです。

あ、この小説は東方 project の二次創作でして、キャラ崩壊
やざんこくなシーンがあるかもしれません。
苦手な方は、お使いのメディアを初期化したり塩水につけてみたり
と、各自対策をとってみましょう。

とうほうちゃんやうじちゃん

とうほうさんどりにゃん

昔々、ある所に、それはそれは美しくやさしい少女がいました。

少女が幼い頃、実の母親が死んでしまったので、今は新しいお母さんとその連れ子であった二人のお姉さんと一緒に住んでいます。

「ああシンデレラ。あなたは何て美味しそうな娘なの」

新しいお母さんは、幽々子という名前で、とつてもいじわるな人でした。

「シンデレラ、肩もんで頂戴」

「シンデレラ、じゃなくてちえええええええええええええええええん！

紫姉さまを甘やかすことは無いぞ！ ぬわ！ ちえん！ 服がほつれているじゃないか！ 今直ぐ縫ってやる！ あ、ちえんにぴったりのアップリケがあるぞ！ それを付けてあげよう！」

二人のお姉さんは、紫と藍という名前なのですが、お母さんと同じくとつてもいじわるな人でした。

藍はシンデレラにお花やらペンギンさんやらのアップリケで継ぎはぎだらけの服を着させ、紫は自分の介護をシンデレラに強要していたのです。

「ちええええええええええええええええええええええん！ おふろの時間だぞ！ 一緒に入ろう！」

「藍さまあ。橙はもう一人でお風呂に入れますよあ」

「ちええええええええええええええええええええええん！ 何て所で寝ているんだ！ 風邪を引いてしまうぞ！ さあ、私のもとにおいで」
「藍さまあ。橙はちゃんと自分の布団で寝ていましたよお」

シンデレラはお風呂に一人で入ることも許されず、寢床さえも自由には選ばせて貰えませんでした。

「ちええええええええええええええええええええええん！ またかまどのそばで遊んでいたのか！？ 頭に灰がいつぱいついてるじゃないか！」

「藍さまあ。ごめんなさい」

暖かく居心地の良いかまどの近くに居るおかげで、橙の頭にはいつも灰がついていました。そこで紫は「灰かぶり……シンデレラね」とあだ名をつけてしまいました。

ある日、お城の王子様からシンデレラ達に、お嫁さん選びのパティーへの招待状が送られて来ました。

「王子様と結婚すれば美味しい物いっぱい食べられるかしら」

「お母様、私が結婚すればお母様は何もしないでも食事にありますますわよ」

「ちええええええええええええええええええええええん！ おまえに結婚はまだ早い！ 家でお留守番だ！」

いじわるな三人は、もちろんシンデレラを連れて行く気はありませんでした。

シンデレラ自身もまだそういうのは早いと思い、三人を見送りしました。

しかし、三人を見送った後に、シンデレラは気付いてしまったのです。

「ひ、ひとりであるすばん……。橙はさびしいです……」

ついにシンデレラは耐えきれなくなり、シクシクと泣いてしまいました。

「藍さまあ、紫お姉さまあ、お母さまあ、遠い所に行ってしまったのですか……」

シンデレラは自分もお城に行きたいと思い、外に出ました。しかしお城は遠く遠く離れた場所に建っています。シンデレラの足ではとても行ける距離ではありません。

「藍さまああ、さ、さびしいです、うええええええん！」

「……えと、だ、大丈夫？」

いつの間にか、シンデレラの目の前に大妖精が立っていました。

「何で泣いているの？ わたしが力になるよ」

「ひつく、橙はお城に行きたいです……」

「お城かあ。たしか今日はパーティーの日だよね」

「橙は藍さまに会いたいです……」

「ああ、何て素直でいい子なんだろう。わたしが魔法を使って助けてあげるよ」

妖精はシンデレラの不憫な姿を見て心が痛み、シンデレラをお城に送ってやることにしました。

「まず、服……は可愛いね。チューリップとかうさぎとか色々ついでるね」

「藍さまがつけてくれたんですよ。えへへ」

「じゃああとはキレイな馬車が必要かな？」

「わあ、楽しみです！」

「……」

「……？」

「……」

「……え？ 馬車は……？」

「……ごめんね橙ちゃん。私実は何の能力も持っていないの」

「……ひつく……」

「な、泣かないで！ 誰かお城に連れて行ってくれるような人さから！」

「……あ」

シンデレラが妖精のやさしさに感謝し、天に祈ろうと空を見上げました。するとシンデレラは何かを見つけたようで、空を指差しました。

「あ！ ホウキで空を飛んでいる普通の人だ！ 橙ちゃんちょっと待ってね。あの人を呼んでくる！」

妖精が普通の人を連れてきます。

「お願いです。この不憫な子をどうかお城まで連れて行ってください」

「藍さまに会いたいです」

「分かった分かった。ただし条件がある。夜の十二時までには用事を済ませよ。私はその時間に帰るんだぜ」

「わかりました。橙は約束を守る子です」

（その藍さまと一緒に帰ればいいんじゃないかなあ……？）

「妖精さん、ありがとうございます！」

「え？ うん、またね。あ、何もしてあげられなかったおわびに、このリボンをあげるね」

最後に、妖精は橙に黄色いリボンを渡しました。

シンデレラは普通の人にお城の大広間まで送り届けてもらいました。

シンデレラが大広間に現れたとき、その余りのかわいさにホール
の皆が見とれてしまいました。

「藍さまあー！ どこにいるのですかー!?!」

シンデレラが叫ぶと、それに気づいた王子様が、橙のもとに全力疾走してきました。

「ちえええええええええええええええええええええええん！ 何でおまえがここにいるんだ!?!」

「藍さまあ。会いたかったです……。その格好はどうしたのですか?」

「ああそうだ。実は私がこの国の王子なんだ」

「すごいです！ 藍さま！」

シンデレラを気に入った王子様は、二人で楽しい一時を過ごしました。

しかし、楽しい時間というものは、あっという間に過ぎてしま

ます。時刻はもう、十二時になるところでした。

「あ！ いけない！ 橙はお家に戻らないと藍さまに怒られてしまいます！」

「ちえええええええええええええええええええええええん！ 私はここにいますというのに！ そのおバカさがまた可愛いよ！」

シンデレラは急いで城の外に出ます。

「お。時間通りだな。帰ろうぜ」

「はい！ 今日はありがとうございました！」

王子様が城の外に出てきた頃には、シンデレラはもういませんでした。

「ちえええええええええええええええええええええええん！

私と一緒に帰れば良いじゃないか！ おや、このリボンは……？」

翌日、王子様は拾ったリボンの持ち主と結婚すると言って、町中の娘達を調べてまわりました。

直接シンデレラのもとに行くことが出来ないのは、王子という職業は公務員なので、正しい手順を踏まなければならないからです。

王子様は頃合いをみて、シンデレラの家を訪ねました。

「それぞれ順番にこのリボンをつけてみなさい。演出のためにちえんは最後だよ」

「私が最初につけるわ」

出度いぜー！」と言ってキラキラした星を降らせてくれました。

それからシンデレラは王子様と結婚して、いつまでも幸せに暮らしましたとさ。めでたし、めでたし。

とじほしちゃんやじじちゃん（後書き）

キャスト

シンデレラ：ちえん

王子様　　：八雲　藍

お母様　　：西行寺さん

お姉様1　　：八雲　紫

お姉様2　　：八雲　藍

妖精　　　：大妖精

普通の人　　：霧雨　魔理沙

よんぽんせいのまの(前書)

短いです

とうほうきんのもの

とうほうきんのもの

昔々、ある所に、ホウキに乗って空を飛ぶことが趣味の、女の人
がいました。女の方は霧雨魔理沙という名前でした。

ある日、女の方がホウキに乗って空を乗っていると……

「ぬあう！ 手がすべって私が乗っているホウキと新品の八卦炉と
大切な帽子とパチユリーから借りた本と霊夢に貰ったみかんとアリ
スに作ってもらった人形と香霖から奪い取った瓶コーラにとりの
光学迷彩を湖に落としてしまったぜ！」

不注意によって、女の方が持っていた所持品を、湖に落としてし
まったのです。

女の方は大切な物を失くしてしまい、湖のほとりで泣いてしま
いました。しばらくすると、湖の中からチルノという妖精が出て来
て、女の方に尋ねました。

「ねえ、あたいが気持ち良く寝てたら空から物がいつぱい落ちてき
ただけど。あんたが落としたの？」

「ああ、私は大切な思い出を失ってしまったんだ……」

「そんなに落ち込まないでよ！ 落とした物返すからさ！」

妖精は、湖の中から金のホウキを取り出しました。

「あんたが落としたのはこれ？」

「違う」

女の人が否定すると、次に銀のホウキを取り出しました。

「じゃあこれ？」

「違うぜ。私が落としたのは普通のホウキと緋ひ々色金の八卦炉と大きな帽子とパチュリーの『これであなとも肉食系！』っていう本と霊夢にもらったみかん33個とアリスに作ってもらったパチュリーの人形と香霖から強奪した瓶コーラという爆弾とにとりがビニール袋と間違えて渡してくれた光学迷彩だぜ！」

「え？ え？ もう一回いつて！」

「私が落としたのはオリハルコンのホウキと緋ひ々色金の八卦炉と絶対に破れない布で出来た大きな帽子とパチュリーの『これであなとも肉食系！ 相手の心も驚づかみ！』っていう本と霊夢にもらったみかん63個とアリスに作ってもらったパチュリーの人形（等身大）と香霖から強奪した瓶コーラという食用爆弾とにとりがビニール袋と間違えて渡してくれた光学迷彩完成版だぜ！」

「落とすすぎだよ！ わかんないよ！ もう全部あげるよ！」

妖精は正直な女の人に感心して、金の物品と銀の物品と女の人が落とした物品を全部女の人にあげました。

女の人は大層喜び、他の人に言いふらし、一躍有名人になりました。そしてある日、女の方は取材を受けることになりました。

「清く正しい射命丸です。今回魔理沙さんは巨万の富を得たそうですが、一体何が起こったのですか？」

「湖に物を落としたら妖精が現れていい物くれたんだぜ」

「そうなんですか。くっくっくっくっくっ」

記者は、それを聞いて早速湖に向かいました。

「あやややややややややや。故意に私の写影機と扇子を落とし

てしまいました！」

そうして記者は、号泣してしまいました。すると、湖の中から妖精が出てきました。

「……あたいが遊んでたらまた物がふつてきたんだけど」

「はいそれは私の物です大切な地上デジタル一眼レフカメラと今流行りの『次世代型』『小型』『食べる』『塩』『生』『半熟』『女子』『扇子』『リッチ』『不景気により減量しました』を落としてしまったんです！」

記者が妖精の質問に答えると、それに怒り狂った妖精は、

「あたいの時間を邪魔するなーあっ！」

と言って攻撃しようと思いましたが、記者が怖い目をしていたので湖の中へ逃げ込みました。

「あーあ。またにとりに新しい影写機を作ってもらつように“頼まなきゃ”ね……」

妖精は、正直な人には優しく、嘘つきには厳しいです。しかし、妖精にも都合が良い時と悪い時があります。

妖精は、正直者が嘘つきなのかただけではなく、相手の気持ちを考えられる人でなければ優しくしないのでしょうか。

とじほじきんのもの（後書き）

有名な童話って他に何かあるのかなあ？

とじほじつらしまたるお(前書き)

我が右腕が止まらぬ！

とうほうづらしまたるお

とうほうづらしまたるお

昔々、ある所に、水橋つひしまたろおパルスィという心が汚れているように見えるけど実は優しい若者がいました。

ある日、たろおが海辺を歩いていると、子供が亀をいじめているのを見つけました。

「ああキスメキスメー！ もふもふしたいよー！ 甲羅おけの中から出てきてよー！」

「きゃー！ 土蜘蛛に襲われてるー！ そこにいる偶然通りかかったパルスィさん！ 助けてー！」

亀に呼ばれた気がしたたろおは、そばに行ってみました。

「……何でそんなに楽しそうに襲われているの？ 妬ましい妬ましい、ね、た、ま、し、い、わ。爆発しろ」

「絶対に離さない！ キスメへの愛は本物なのだーっ！」

「きゃー！ ヤマメに甲羅おけから引きづり出されるー！ そこで嫌らしい目つきで見ているパルスィさん！ はやく助けてー！」

亀はそう言って泣き出してしまいました。亀は、泣きながらもたろおの事をずっと見ています。

「くっ……。そんな目で見るな！ 私の中に眠る嫉妬に狂いし暴虐の魔物『GJC』が目覚めてしまっ！」

「きゃー！ パルスィさんのGJCグリーンアイズ・シエラスィクリーチャーが発動してしまうー！ GJCヴァイスが発動したら最後、狙われた二人のうちどちらかが死ぬまで嫉妬を

見させられるんだわ！ まさに決死魔術^{ラスト・スベル}！」

「何ということだ！ そんなものが放たれては私の身が持たない！
私はここで失礼させてもらう！ また会おう、キスメたん！」

たろおは子供を追い払い、亀を助けてあげました。

「……もう大丈夫だわ。バシスタントスパイダー憎き土蜘蛛はもういない……」

「ありがとうございますバルスィ翠緑の賢者さん！ 惚れました！」

「ふふ。こんな私を惚れてはいけないわ。私は神に見放されし孤独の姫君。私と一緒に居る者は必ず不幸になる……。さあ、故郷に帰りなさい。グッバイ」

たろおはそれだけ言い、亀を海の中へ帰してやりました。

亀を助けてから数日後、たろおが再び海に行き、武術の訓練をしていると……。

「パルスィーさん！ おーい！」

「む、何？ また誰かが私を狙っているの？」

どこかから声が聞こえてきます。

「こつちですよー！ キスメですよー！」

「何だ。この前の弱きキスメ龜の子ね」

すると海の中から亀が出てきました。

「この前は助けてくれてありがとうございます」

「礼には及ばないわ。当然の事をしたまでよ」

「いえいえ、ぜひお礼をさせて下さい！ パルスィさんを海霊殿ウチキウレイノミヤに招待します！」

「海霊殿？トラウニツクキングダム 私の知識の図書館に、そんな物は存在しない」

「それはそうです！ 海霊殿ウチキウレイノミヤは海の底にあります。普通の人なら知る事は無い場所です！」

「そんな所に、海を捨て陸に生きる事を選んだ愚かな人間が行けるというの？」

「行けますとも！ さあ！ わたしの甲羅の上に乗って（桶の中に入って）下さい！」

「分かったわ。……其処（底）には安住の地があるのだろうか」

たるおを乗せた亀は、どんどん海底へと潜って行きます。

海の中は、見渡す限りが青の世界で、それを彩るようにカラフルな魚や美しい桃色のサンゴが生息していました。

「……美しい。嫉妬に溺れたこの私の心も、この世界の前では何の価値も無いのよね」

たるおが考え事をしていると、海霊殿ウチキウレイノミヤに着きました。

「着きましたよ！ ここが海霊殿ウチキウレイノミヤです！ キレイでしょ？」

「そうね。何よりも美しい建物だわ。まるで磨きたての金剛石ダイヤモンドのよう
うに、ね」

「お姫さまのところへ案内しますので、ついて来て下さい」

亀に案内され、どんどん奥に進むと、海霊殿ウチキウレイノミヤで一番偉い乙姫さま
とその他大勢が、熱い歓迎をしてくれました。

「ようこそたるおさん。この海霊殿トラウニツクキングダムの主、古明地さとりです。いい

え、何も言わなくても結構です。私には真の義眼サード・アイがありますから

(くっ……！ 私の心を読まれているわ……！)

「そう。私はあなたの深層心理サイコデプスを観る事が出来る。……え、何ですって!？ あなたも奴に狙われているのですか!？」

(こいつ……私の宿敵ザ・ラヴを一瞬で……！)

「実は私も狙われていました。でももう大丈夫です。ここには私達の味方しかいません」

(そんな樂園が存在していたのか！ 迂闊ウグワンだったわ。もっと早く知っていればこんな体になることは無かったのに……)

「可哀想に。あなたは奴に身を焼き尽くされてしまったのね。いいわ、気が済むまでこの海霊殿マリニクキングダムに身を置きなさい」

「……感謝するわ。私の仲間よ」

そしてたるおは宴会場まで連れられました。

たるおが席に座ると、猫や鳥が様々なごちそうを運んで来て、運び終わると今度は素晴らしい音楽を背景に、見事な舞を披露してくれました。

「ここが……私の求めていた樂園セージスヘヴン」

たるおはこの場所を気に入り、一日、もう一日と過ごす内に、三年程の月日が流れてしまいました。

そしてある日乙姫さまが言います。

「パルスィ。帰る刻ときが来たようね」

「何ですって!？ 私を見捨てると言うの!？」

「違うわ。……此れは始まり。貴女は私と違って本当は美しき心を持って居る。此処に居続ければやがてその身を滅ぼしてしまう」

「嫌だわ！ 私はこの場所で最後を迎える……!」

「出来ればその望みは叶えてあげたいのだけど、どうにも出来ない

わ。これは私の意志では無く、ドラムニックキングダム海霊殿の決定。私から贈り物がある。せめてもの気持ちよ」
「……分かった。ドラムニックキングダム海霊殿の決定ならば何も言えない。贈り物とは何？」

乙姫さまは寂しそうに、一つの小さな箱を取り出しました。

「玉手箱よ」

「何が封印されているの？」

「この中には貴女の『時』が入っているわ。その『時』は貴女の力にもなり、害にもなる。気をつけて使いなさい」

「……問題無いわ。相棒は私の真の心を知っていてこの箱を渡しているのでしょ？」

「……パルスイ同士には何でもお見通しね。私の心を読む生物は貴女以外に居ないわ」

「じゃあ、お別れね」

「さようなら、パルスイ」

「私達は何時まで、心が繋がっている」

「私達は何時まで、心が繋がっている」

たろおは、じゆいん海霊殿に来た時と同じ亀に乗って、地上に帰りました。

たろおが地上に出ると、何だか違和感を覚えました。

「ここは……ユートピア幻想郷では無い……?」

たろおが武術の訓練をしていた岩場が無く、亀を助けた海岸の地

形も少し変わっています。

「三年とは、ここまでも世界を変えるのね」

たろおは考えられる理由を考え、自分を納得させました。
するとそこに、一人の子供が歩いて来たので、事情を聞きました。

「えと……あの……つ、土蜘蛛さん？ み、水橋パルスイというひとのい、家をご存知ですか？」

「んん？ 水橋パルスイの家なら千年前に本人が行方不明になって、取り壊されたねえ。君はパルスイの孫か何かかい？ あいつは私の友達だったんだ。君はあいつによく似ているよ。どうか私をヤマメって呼んでくれないか？」

「と、と、と、友達……！ わ、私……ヤマメと……！ そ、そんな……良いの……？」

どうやら海霊殿うみたまごでの三年は、地上では千年と等しいようです。たろおは、皆にすっかり忘れられてしまっていました。

悲しみの余りうつむいていると、たろおは乙姫から玉手箱を貰ったことを思い出しました。

（これは、さとりがくれた箱。この中には私の『時』が封印されているらしい。『時』とは地上の千年の事か？ ならばこの箱を開ければ……失った千年を取り戻せるかもしれない！）

たろおは思いきって箱を開けてしまいました。
すると中から、真っ白な煙がもくもくと出てきます。

「ああ、私の記憶が次々と……」

煙の中に、楽しかった乙姫さまとの生活が写し出されます。
最後は、滅多に見る事の無かった、乙姫さまの笑顔が写りました。

「……本当に、お別れなのね……」

そして煙が消えると、そこには千年の時を経た、浦島太郎が立っていました。

「あ、パルスィ……パルスィなのね！」

「……久し振り。ヤマメ」

とうほつづらしまたるお(後書き)

……書いてて楽しかったけど、読みにくいですね。

キャスト

浦島たるお：水橋パールスイ

乙姫さま：古明地さとり

亀：きすめ

いじめっこ：黒谷ヤマメ

猫や鳥：お燐やおくう

竜宮城：地霊殿

とうほうたけとりものがたり

とうほうたけとりものがたり

昔々、ある所に、竹取の姫おしなというおばあさんがいました。

「ルナ！ 竹をとりに行ってくるわ！」

「そう。暗くなる前にちゃんと帰ってくるのよ。サニー」

竹取の姫には、サニーミルクという通り名があり、竹取の姫の妻であるただの姫には、ルナチャイルドという通り名がありました。

サニーミルクが野山に行くと、根本が光っている竹が一本ありました。

「なんだあれ？」

サニーミルクは、その竹を切ってみることにしました。

「よく分からないからとりあえずとりゃあー！」

すると、竹の中から九センチ程の小さな女の子が出てきました。

「す、すごい！ まるで星の青玉かのような美しさだわ！」

「いきなりなによ」

ルナチャイルドと二人暮らしでは、何か一人足りないと思っていたサニーミルクは、その女の子を持って帰ることにしました。

名前が無いと不便だと思い、サニーミルクはその女の子にかぐや

姫と名付けると同時に、スターサファイアという通り名もつけてあげました。

そして家に帰ったサニーミルクは、すぐにルナチャイルドに報告します。

「ルナ！ 『三人目』を見つけたわ！ これでわたしたちは完全体よ！」

「スターサファイアこと、かぐや姫です」

「ようやく……見つけたのね。長かったわ」

サニーミルクとルナチャイルドは、スターサファイアを仲間として大切に育てることにしました。

三年程経ったある日の事です。

「そろそろ頃合かしら。スター、『お嫁さん』になる時よ」

ルナチャイルドが言いました。

「いたる所に婿募集のポスターを貼ってきたわ！」

外出していたサニーミルクが丁度帰ってきて、叫びました。

「心の準備はできてるわ。いつでもいいよ」

と、スターサファイアが言った瞬間、

「私の嫁！ はやく出て来て欲しいんですけどww」

「……蓬萊山様、そのだぶりゅーがいつぱい入った言葉遣いを直して下さいよ」

「えwwこのウサギww何ww言ってるのwwww」

外から巷で話題になっている王女、蓬萊山皇子と、その友人であり落語家でもある、優曇華院イナバの話し声が聞こえてきました。さらに三人の若者が集まったようです。

「まだかしら」

「早く出てこーい」

「はっ……！！ 歩いてたら無意識にここに……！！」

三人の若者は八意皇子、因幡御主人、古明地小石麻呂でした。皆貴族なので、とても偉いのです。

「来たわ来たわ……！！」

障子に穴をあけて外を見たサニーミルクは、スターサファイアに合図を送ります。

スターサファイアは外に出て、五人の若者に向かって言い放ちます。

「仏の御石の鉢と蓬萊の玉の枝と火ネズミのカワゴロモとツバメの子安貝と竜がもってるすごい玉を持ってきてくれたら、結婚してあげる」

スターサファイアが無理難題を出題すると、五人の若者は驚いてしまいました。

「ちょｗｗわｗｗたｗｗしｗｗそｗｗねｗｗもｗｗつｗｗてｗｗる
ｗｗんｗｗでｗｗすｗｗけｗｗどｗｗ」

「いやはやこれは奇遇奇遇。私も丁度持っていますよその鉢とやらを」

「明日新薬開発に使をうと思っていた子安貝が、私の右ポケットに入っているわ」

「私が今着てる服がカワゴロモですが、何か？」

「……はっ！ 無意識のうちにキレイな玉を拾っていたわ……！」

若者達はなんと事前にそれらを持っていたのです。

いたずらのつもりで始めた事で、結婚する気は全く無かったスターサファイアは言葉を失ってしまいます。

「え……いや……私、星に還らなきゃ」

何とか言い訳をして、今日はここで帰ってもらおうとすると、空から人が降りてきました。

「月から来たパチュリー・ノーレッジホツよ。月の子、私と一緒に月に帰りましょう」

「え？ いきなり何？」

スターサファイアは突然の出来事の連続に、混乱してしまいます。すると、家の中からルナチャイルドが出て、言いました。

「月の子は私よ！」

「そう。じゃあこの子は何？」

「私はスターサファイアです。星の青玉です」

「成る程ね。でも月と星は違うようで同じ物。二人共連れて行くわ」

月の使者は、二人を連れて昇天してしまいました。

「意ｗｗｗｗ味ｗｗｗｗ不ｗｗｗｗ」

「蓬莱山様、私にはその言葉遣いの方が意味不明です」

「ふふ。良い暇つぶしだったわ」

「チツ。火に入れると妙に発光するこの衣、無駄になった」

「……はっ！ 無意識のうちに姫がいなくなってる……！」

蓬莱山皇子、優曇華院イナバ、八意皇子、因幡御主人、古明地小石麻呂は、諦めて帰りました。

残されたのはサニーミルクのみです。

「……一人になっちゃったよ。参ったね」

とうほうたけとりものがたり (後書き)

キャスト

竹取の姫 …… サニーミルク

姫 …… ルナチャイルド

かぐや姫 …… スターサファイア

蓬莱山皇子 …… 蓬莱山輝夜

落語家 …… 鈴仙・優曇華院・イナバ

八意皇子 …… 八意永琳

因幡御主人 …… 因幡てゐ

小石麻呂 …… 古明地こいし

気まぐれ更新です。ゆるして。

とうほうつるのおんかえせ

とうほうつるのおんかえせ

昔々、ある所に、お婆さんがおりました。

「清く正しい文々。新聞が全く売れませんよ。皆頭おかしいんじゃないですか」

お婆さんの名前は、射命丸文といって、自分こそが最も清く正しいと思ひ込んでいました。

お婆さんの仕事は町へ新聞を売りに行くことです。お婆さんは今日も新聞売りをして、家に帰るところでした。

「……。よく見るとツルがワナにかかっているじゃないですか」

帰り道で、お婆さんはワナにかかったツルを見つけ、可愛そうに思いました。

「あ！ あやさぁー！ーん！ たーすーけーてーくーだーさーい

「ー！」
「……椀わんですね。何を遊んでいるのやら」

お婆さんは、ツルを助けてやることにしました。助けてもらったツルは大変喜びました。

「ありがとうございませう文さん！ ではさようならー！」

ツルはお礼を言って、飛び立っていきました。

「……お礼の品位残しなさいよ。流石犬っころと言ったところですね。礼儀がなってます。明日の記事にしよう」

お婆さんは良い事をした気分になって帰りました。

その日の夜のことです。お婆さんは明日の記事を作るために、同居しているもう一人のお婆さん、姫海棠はたてに、助けたツルの話をしました。

「……という訳で、はたてはその駄犬ツルについて調べなさい。私は鉛筆削りに没頭してますから」

「えー面倒くさい。文が全部妄想すればいいでしょ」

「黙りなさいニート。私は毎日新聞売りに出て頑張っているのです」

二人のお婆さんは、今を生きるのに必死でした。

「はあ。分かったよやればいいんでしょやれば。この旧式」

「旧式とは何ですか。伝統を守る人と言いなさい」

「無視無視。さあ私の最新機器よ！ 椀ツルを写し出さなさい！ 隠者ハミの先生！」

「その検索する前に『はーみつとごおぐえ』って叫ぶ癖、やめませんか？」

「うるさい！ ……あ、出た。『椀 駄犬』でヒットした」

「……そのまま続けてください」

二人のお婆さんが仲良くお話をしていると、コンコン、と戸を叩く音がしました。誰かが家に訪問してきたようです。

「あーやーさーん！ 開けてください！」

「うわっ。椀が来ましたよ。はたて、記事を見られないようにね」
「へいへい」

お婆さんが戸を開けると、そこには美しい娘が立っていました。

「どうか一晩泊めてくれませんか？ ちなみにわたしは昼間のツルなんかじゃないですよ！」

「おお、外は大層寒かったですよ。清く正しく泊めて差し上げますから、お上がりなさい」

「ありがとうございます！」

「（……媚びるな犬。今日はあなたの生態を赤裸々にしてやりますよ）」

「へ？ 文さん何か言いましたか？」

「いえいえ何でも。夕飯の仕度をするので手前の座布団に入り口側を向いて座っていて下さい」

「そんな！ わたしも手伝いますよ！」

娘はお婆さんの手伝いをして過ごしました。

次の日のことです。朝、お婆さんが起きると、隣に寝ていた娘がいません。お婆さんは、びっくりしてもう一人を起こしました。

「はたて！ はたて！ 椀がいません！」

「んー……。スマホが欲しい……」

「当分無理よ！ ほら起きて！」

「……何だよ朝から。ふあーあ……」

「椀がないんですよ！ 記事は無事ですか！？」

「大丈夫よ。記事は全てデータになって、ああ！！」

「つつ!?!」

「昨日ブログ更新するの忘れた……」

「……NEET」

「思うんだけどさ、それ『ねえてい』って読まない?」

「読みません」

お婆さん達が朝の会話を楽しんでいると、娘が玄関の戸を開けて、家の中に入ってきました。

「おはようございまーす! 洗濯物しましたよー! 掃除もしましたよー! ご飯もつくりましたよー!」

娘は家事を全てこなしてくれたのです。お婆さん達はとても喜んだ表情をしていました。

「(……: どうやらただのばかな子のようですね)」

「(このまま住まわせれば何かと使えるんじゃない?)」

「(そうですね。ふっふっふっふっ)」

「(文も家から出なくて済むようになるかもね。くっくっくっくっ)」

すると、娘は言いにくそうに、話し始めます。

「あ、あの、わたし、身寄りが無いんで、この家に置いてくれませんか?」

「いいですよ。気が済むまでいて下さい。あ、家事は頼みましたよ。あと新聞売りもね」

お婆さん達は、喜んで娘を迎えました。

ある日の事です。

「文さん！ 機織はたおりをしますのぞかないてくださいね！」
「そうですか。精々頑張ってください」

娘は機織をするために、隣の部屋にこもってしまいました。
娘が出てきたのは次の日の朝です。

「できました！ 文さん、これを売ってお金にしてください！」

娘は、それは美しい織物をお婆さんに渡しました。

「な、こ、これは……？」
「わたしの努力の結晶ですよ！ 今日機織をするのぞかない
てくださいね！」

そう言って、娘は再び部屋にこもってしまいました。
お婆さんは、こんなにも美しい布を作る娘の作業風景を、見てみ
たくなりました。

「はたて、いざという時の為に設置しておいた監視カメラ、スイツ
チオンです」
「ニートとか言うけど私ってかなり役立ってるよね」

お婆さん達は、娘の約束を破って部屋の中を見てしまいます。
そこには、部屋を物色している娘の姿がありました。

「これは……」

「何コレ！」

すると、娘が部屋の中から出てきました。

「文さんとはたてさん。バレてしまいましたね。そう、実はわたしはあの時助けてもらったツルなのです」

「知ってますよ」

「逆に何で正体がバレないと思っていたのか聞きたいわ」

娘はお婆さんの言葉を聞かなかったことにして続けます。

「正体がバレてしまった以上、わたしはここには居られません。今までありがとうございますさようなら」

娘は、素早く外に出てしまいました。

「あ、こら！ 待ちなさい！ 部屋で物色して何が目的だったの！？」

「すぐに分かりますよー。わたしの恩返しですー……」

お婆さん達が止めるのも聞かずに、ツルは遠くへと飛び去ってしまいました。

すると、

「え！ 何！？」

「うわあ！ 服が！」

お婆さんが着ていた服がビリビリに破けてしまいます。その服は、ツルが洗った服でした。

「う、嘘……」

「家がー！ー！」

破れた服に反応する前に、今度は家が爆発してしまいます。家は、毎日ツルが掃除をしていました。

「あ、ああ、何もかも……お腹が痛い！」

「私の『隠者の先生』……は、腹があ！」

全てを失ったことに絶望を感じる前に、お婆さん達のお腹が急に痛くなりました。食事は、毎日ツルが作っていました。

「……してやられた」

「……心を許したのが間違いだったね」

お婆さん達は、ツルが飛んで行った方向を、恨みのこもった目で睨み続けましたとさ。

善意でツルを助けたのに、恩を仇で返されてしまいました。世の中何を信じて良いのか分からないのです。めでたしめでたし。

とうぼつづるのおんかえせ(後書き)

キャスト

第一お婆さん・射命丸文

第二お婆さん・姫海棠はたて

つる　　・犬走権

文と権は仲が悪いと言つことで、こんな事になりました。

とうほうへんぜるぐねーてる

とうほうへんぜるぐねーてる

むかしむかし、ある所に、貧乏な木こりがいました。名前は聖白蓮です。

木こりには、妻と二人の子供がいます。妻は、村紗水蜜といい、子供は、一人は姉の寅丸星、通称ヘンゼルで、もう一人は妹のナズーリン、略してグレーテルでした。

ある年の夏、異常な寒さが国を襲ったので、畑の作物が育たなくなつてしまい、食べ物が手に入らなくなつてしまいました。

ただでさえ貧乏な木こりの一家は、米ですら手に入れるのがやっとです。

木こりはこれからの生活が不安で、眠れません。

「はあ……。どうしましょう。あれですか。出家でもしましょうか」

木こりが悩んでいると、妻が話し掛けてきました。

「聖、このままでは皆飢え死にってしまうよ」

「そうですねえ。皆で出家しましょうか」

「そんなんじゃ解決しないよ！」

「じゃあ……。入滅しますか？」

「だめだよ！ 死ぬじゃん！」

「ええと……。皆で助け合つて生きましょう！」

「皆貧乏だよ！ 改善しないよ！」

「ふむ……。思い付きませんねえ」

「……っ」

「へ？」

「一つだけある。……それは、私達の子供を、捨てること」

「……っ！ それだけは駄目です！」

「静かに。子供達に聞かれたら不味いよ」

「……」

「このままこうしていたら、全滅なんだ。子供達はここで諦めるしかない」

「……でも」

「でもとかだつてとかそういう問題じゃないんだ。これは私達が生き残るための事だ。決して悪い事じゃない」

「え、悪い事ですよ？」

「だあーかあーらあー！」

妻は木こりを有無を言わせない態度で言いくるめ、子供を捨てることに決めました。

この時代はみんな空腹。子供とて例外ではありません。

空腹で寝付けなかった二人の子供は、木こりと妻の話をしつかり聞いてました。

「ほほう。私達を捨てる気なんだね。聞いたかい、お姉様？」

「……もうたべられない」

「……寝てる。やれやれ、気楽なものだ。さて、私は対策を練ってくるか」

こうしてグレーテルは、両親が寝静まった頃に、外へ抜け出して小石をいっぱい拾ってきました。

「お姉様、安心して下さい。このナズーリングが守ってあげます」

次の日、夜がまだ明けきっていない早朝に、お母さんが姉妹を起こしに来ました。

「さあ起きなさい！ 今日には森に行くよ！ おにぎりを一つずつあげるからね。お昼に食べなさい」

そう言ってお母さんは、姉妹にお昼ご飯を渡しました。

「お姉様、私の分も持って……いや、両方とも私が全部もつよ」
「え！？ なんですですか！？ な、ナズ、一人占めですか！？」
「お姉様が持ったらなくすでしょう」

グレーテルの持ち物は、拾った小石と昼食でいっぱいです。

「あれ？ ナズ、太りましたか？ もしかして私に隠れていいものを……！？」

「家を出るまで黙ってくれないかい」

そして、家族四人そろって森へ出かけました。

途中で、グレーテルは度々止まって拾った石を道しるべとして、一つずつこつそりと落としていました。

その様子を不思議に思った木こりが、グレーテルにたずねます。

「なんで度々止まるんですか？」

「え、ええと、エンカウント率を下げるため……？」

その答えに木こりは納得しましたが、お母さんは納得できません。

「敵なんて出てこないよ！」

「それでは、やはり私がエンカウント率を下けているんだな」

「……もう、それでいいよ」

そうこうしている内に、森の中にたどり着きました。

木こりが姉妹に言いつけます。

「ここでたき木にあたって待っていて下さいね。私と水蜜は木を切つてきます。小枝はここに沢山ありますから、寒かったら足して下さいね」

姉妹が言われた通り、たき木に当たって待っていると、遠く離れた所から木を切る音が聞こえてきます。

「……ふむ。木下闇薪に当たり姉妹聞く母ここにあり父ここにあり」

「は？ どうしたんですかナズ。日本語喋れなくなりましたか？」

「……木が茂って暗い所で子の心は絶望を感じている時、私達は父や母の存在を認識できて安心したということさ」

「ふーん。要するにちゅうにびょうですね！」

「もう一生黙っててくれないか」

しばらくして、姉妹はお腹がすいたので、持ってきたおにぎりを食べました。その間も、木を切る音は、ずっと聞こえてきます。

おにぎりを食べ終わり、眠くなった姉妹は、そのまま寝てしまいました。

火が消え、夏らしくない寒さによって、姉妹が目覚めると、いまだに木を切る音が聞こえてきます。

「……おかしいな」

「何がですか？ 妄想ですか？」

「お姉様はもう駄目だね」

「よく分からない内に駄目にされました！」

不思議に思った二人は、その音が出ている所に行ってみると、そこには枝にぶらさがった丸太があり、風にゆられてコツン、コツンと音を立てています。

「そうか。こういうことだったのか。お姉様、私達は捨てられたのです」

「何を言っているんですか……？ う、うそですよね」

「本当だ」

「い、嫌だ！ このまま死んでしまうなんて……！」

ヘンゼルは泣き出してしまいました。

「大丈夫だよ。この時のために道しるべを置いたんだ」

「……帰れるんですかあ」

「夜まで待つて、月明かりを反射した小石たちが私達を導いてくれるよ」

「さ、流石ナズーリンです！ もう、大好きです！」

「（底まで落として上げる作戦……成功。これでお姉様は私無しでは生きられない）」

やがて夜になり、月明かりに照らされて、キラキラした小石の道を二人で歩き、家に帰りました。

二人が玄開の戸を叩くと、お母さんが出てきました。

「星！ ナズ！ あまりにも気持ち良さそうに寝ているから、置いて

て帰ってきてしまったよ！ テヘッ！」

「そうか。死にたまえ」

「……何も言いませんよ」

二人は家の中に入れてもらい、木こりにも歓迎されました。

しかし、食べ物はないことには変わりありません。

数日後の夜、両親はまた子供を捨てる計画を立てました。

「もう、家に残っている米はおにぎり一つ分だよ。これが無くなれば、私達はもう終わり。子供を捨てるしか道はない」

「そんな事はしたくありません！」

「いいや限界だ。やるよ」

お母さんは木こりの言う事を全く聞きません。木こりはお母さんに従わなければなりませんでした。

例によって、その話を子供達は聞いてました。

「また私達を捨てる気か。石を拾って」

「さあ今日もうお休みなさい。明日は楽しい所に連れて行ってあげる」

グレーテルが外に出ようとした時、お母さんが部屋に入ってきて、密室を作りあげてしまいました。なのでグレーテルは外に出られませんが。

「……おなか、いっぱい」

「はあ。幸せなお姉様だ。こんな時に一体どんな夢を見ているんだ」

次の朝、お母さんは姉妹にスプーン一杯程の、とても小さなおにぎりを渡して森に向かいました。

「やれやれ。また森か。こうなったらおにぎりを目印に置こうか」

グレーテルは、度々立ち止まって、ごはん粒を一粒一粒地面に置きました。

その様子を不思議に思った木こりが、グレーテルにたずねます。

「なんで度々立ち止まるんですか？」

「う、ええと、『せいすい』の効力が切れた時、間違えて進み過ぎないように気を付けているんだ」

その答えに木こりは納得しましたが、お母さんは納得できません。

「そんな気を張らなくても少し歩いた位なら大丈夫だよ！」

「いや、油断はできない。時には一歩進んだだけでエンカウントすることもある」

「クソゲーだよ！」

そうこうしている内に、森の深部にたどり着きました。

両親は、前回と同じくたき木をして、子供達をおいて帰ってしまいました。

「お姉様、今回はごはん粒を道しるべに置いてきたから、夜になつたら帰ろう」

「それじゃあナズが食べるものが無いじゃないですか！ はい、私のを二人で半分こです」

「お、お姉様……」

夜になり、二人が帰ろうとすると、目印のごはん粒が無くなっていました。

「やはり、食べ物駄目だったか。鳥にでも食べられてしまったんだらう」

「だ、大丈夫ですよ！ 歩いていけばいつか出られます！」

姉妹は一晩中歩き続け、次の日も歩き続けました。

ところが、森から出るどころか、より深い所に迷い込んでしまったのです。

とうとう力尽きてしまった姉妹は、木によりかかり、そのまま眠ってしまいました。

そのまた次の日、家を離れて三日が経った朝のこと。

二人はゆっくり歩き始めました。けれど、進めば進むほど森は深くなっていきます。このままでは二人の命が危ないです。

「……全然、出口が、見つからない」

「……私達は、ここで、死んでしまうのですね」

と、姉妹がそれぞれつぶやいたその時、真っ白な美しい鳥がやってきて、きれいな声で歌いました。

「コミケですよー」

「は？」

「夏ですねぇ」

あまりに美しい歌声だったので、二人は聞き入ってしまった。鳥が歌い終わると、今度は二人を案内するように、飛び立ちます。二人はそれについて行き、しばらくすると小さな家を見つけました。二人がその家に近付くと、いつの間にか鳥がいなくなっていました。

「これは……この家はお菓子でできているよ！ お姉様！」

その家の壁はカステラで、扉はようかんで、窓は飴で、屋根はみたらし団子でできていました。

お腹が空いた姉妹は、迷わず家にかぶりつくと、家の中から歌が聞こえてきました。

「腹減りし捨て子は小屋にかじりつくさてかじるのは終には誰か」

グレーテルはその歌に、

「ちゅうにびょう姉に言われてやめにしとされど魔の歌余を汚した
り」

と返し、食事を続けました。

すると中から老婆が出てきました。

「どうも、雲居一輪です。私の家……」

「ひっ！」

「おいしくいただいています」

「やれやれ。中へお上がり。ごちそうがあるわ。遠慮せず！」

そう言って老婆は二人の手を引っ張り、家の中に入れました。お婆さんは二人に色々な果物や飲み物を出してあげました。

「うっ……あ、甘い……。胃がもたれた……」

「甘い物は全部別腹に入ってしまったいますよ？　なので主食を……」

満足した姉妹は、ベットで寝てもいいですという老婆の言葉に甘え、柔らかいベットにもぐり込んでぐっすり寝てしまいました。

「ふ、ふふふふふへっへっへっへ……。どちらからたべてしまおうかねえ」

なんと、老婆は悪い魔女だったのです。子供達を食べるために、お菓子の家を作り、白い鳥で子供達をおびき寄せたのです。

老婆はヘンゼルを飛倉に閉じ込めました。ヘンゼルは一生懸命叫びましたが、それは外には伝わりません。

ヘンゼルを捕まえていい気になった老婆は言いました。

「さあ幼女！　いつまで寝ているんだ！　これから姉さんを太らせるために、ごちそうをいっぱい作ってやるんだ！　水を汲んで来い！」

これを聞いたグレーテルは、度重なる不幸に泣きたくなくなりました。しかし泣いているだけでは何も変わりません。ここは素直に言う事を聞いて、後で二人で逃げる方法を考えることにしました。

しばらく経ったある日、ヘンゼルは豪華な食事を与えられ続け、グレーテルは残飯しか与えられていません。

老婆はヘンゼルが入った飛倉にやってきて言います。

「どれ位太っただろうか。どれ、胸を触らせる」

お婆さんは、目が悪かったので、直に触れないと分からないので
す。

ヘンゼルは、言われた通りにしようとする、老婆の背後からグ
レーテルがアイコンタクトをします。

「（お姉様は馬鹿なのか？ スープのだしにとっておいた骨を触ら
せてあげな！）」

ヘンゼルは、グレーテルの言葉通りに、骨を触らせました。

「こ、これは、無いな……」

まんまと騙された老婆は、グレーテルを連れて戻りました。

それから一月程たちましたが、老婆は毎回騙されていました。
ついに我慢できなくなった老婆は、ヘンゼルを食べることにしま
した。

「おら幼女！ なべに水を汲め！ 火をつける！」

グレーテルは、実の姉を料理する準備をしなければならなくなり
ました。

「（こんなことなら、森でお姉様と一緒に飢え死にしていた方がま
しだった）」

「早くしろ！ かまどに火をつけるんだ！」

老婆は、包丁を研ぎながら言います。

「どうも。キレイな雲居一輪です。とり憑いていた雲山が消滅して、良い人になりました」

「あ、どうも」

そしてグレーテルは、ヘンゼルを助け出し、女の人の案内で宝塔やダウジングロッド、魔天経文など、貴重な宝物を手に入れました。

ヘンゼルとグレーテルと女の方は、それから何日もかけて自分達の家に帰りました。

「お母さーん！ お母さーん！ いま帰ったぞー！」

「ああナズーリン……！」

「星！ 帰ってきたんだね！」

木こりとお母さんは涙を流して喜びました。

お母さんは言います。

「前回も二人だけで帰ってこれたから思わず置いてきちゃった。テヘッ！」

姉妹の怒りは一杯です。

「死にたまえ。ほらお姉様」

「はい！ 食らえっ！ 宝塔スパアアアアクー！！」

お母さんは、ヘンゼルの攻撃を受けて、死んでしまいました。
すると、

「はい。死んで幽霊になったことで心がキレイになった村紗です」

今までとは見違える美しさを持ったお母さんが現れました。

「聖の方のお母さん。魔天経文だよ」

「……まあ！ これで世界征服ができます！」

「ナズ、これで私達家族は幸せですね」

「これからは誠心誠意、頑張っていきたい所存です」

「雲山が滅亡した今、私は自由の身です。ここに住まわせて下さい」

こうしてナズーリン、聖白蓮、寅丸星、村紗水蜜、雲居一輪の五人は、世界征服をして生涯幸せに暮らしましたとさ。

「私達の居場所は、ヒジリさん一家だけだね」

この世界の生存競争の結果は、最後まで生き残ろうとしたグレイテルの勝ちです。めでたしめでたし。

とつぽつへんぜるぐねーてる(後書き)

キャスト

ヘンゼル …… 寅丸星

グレーテル …… ナズーリン

木こり …… 聖白蓮

お母さん …… 村紗水蜜

白い鳥 …… リリーホワイト

老婆(悪) …… 雲山

女の人 …… 雲居一輪

原作が予想外に重い話でした。主人公がヘンゼルかグレーテルの、どちらか一方だけだったなら、物語はどうなってしまうのでしょうか。暗い寒い一人空腹、最低条件です。すごいことになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8423w/>

とうほうどうわどうわ

2011年11月17日01時10分発行